



写真協力：大日本除虫菊株式会社

今の蚊取り線香は、初めは棒状の線香だった

当初の蚊取り線香の形状は棒状でしたが、燃えている時間が短くて細いため、虫除けの効果を上げるためには、何本も焚く必要があり苦戦していました。ある時、上山英一郎の妻・ゆきさんが、お寺の時刻を刻む香炉「時香盤」にヒントを得て、蚊取り線香を渦巻型に改良したことで、現代にも続



島中が白くなった明治・大正・昭和戦後の五月頃の因島

桜の季節も過ぎた五月中旬頃のしまなみ海道を、尾道から今治方面へと車で走ります。因島大橋にさしかかる頃でしょうか、島の柑橘の花たちが、一斉に咲きほこるその香りが、かすかに車内に漂い始めます。橋の中程になると明確にその香りが柑橘であるという事を感じ取ることが出来ます。その期間は僅か二週間程のことです。瀬戸内海の島々も、各所で柑橘の白い花たちが島を覆い、その香りが漂っている事でしよう。白い花は、秋になると黄色い果実と変わり、島を覆います。



▲ 除虫菊栽培が最盛期だった頃の島の様子。手前の畑と奥に見える山の畑が、白くなっている様子が分かります。(撮影：郷土写真家・故土本壽美氏)

柑橘の白い花たちが咲き誇る頃、除虫菊も競うように花が咲きます。戦後の間もない頃までは、柑橘の花と除虫菊で「島が白くなった」そうです。少し大げさにも聞こえますが、昔の写真を見ると、心情的には分かる気がします。

除虫菊の栽培が因島で始まるきっかけ

除虫菊が瀬戸内海に入ってきたのは、明治二十年（一八八七）。上山英一郎氏が、福沢諭吉から



のアドバイスもあり、アメリカの植物会社社長のH・E・アマア氏との出会いで、上山氏はアマア氏にミカン・竹・葉蘭・秋菊などの種や苗木を進呈し、その見返りとしてビュハークという除虫菊の種子を譲り受けることになりました。しかし、除虫菊の栽培はなかなか成功せず苦労する中、広島県尾道市向島町津部田在住の村上氏に依頼し、試験栽培に成功。翌年、因島の重井と中庄地区にて本格栽培が始まりました。その除虫菊が「金鳥」KINCHOの商標名で知られる蚊取り線香の始まりとなります。



く「渦巻型蚊取り線香」の発売となりました。

当時も蚊取り線香の需要は高く、因島の重井と中庄で栽培が成功したことによって、瞬く間に瀬戸内海の島々に除虫菊が植えられました。そして国内はもとより、東南アジアを中心とした海外にも需要は高まり、瀬戸内海の島々で柑橘に並ぶ生産を誇っていました。

現在の蚊取り線香は、時代の流れと共に合成薬品へと変わりましたが、その元となった除虫菊は、因島の重井など数ヶ所の除虫菊畑で守り栽培されています。



▶向島の亀森八幡宮の「除虫菊神社」にて、除虫菊の花が咲く毎年五月頃、会社の繁栄を祈願しに来られる金鳥の役員の皆様。

成功を治めた金鳥の創始者・上山英一郎氏は、感謝を込めて向島亀森八幡神社に「除虫菊神社」を造営しました。除虫菊の花の咲く頃には、金鳥の役員一同が、今も毎年お参りに来られます。

一見、関係ないように見えるものも、前後関係を調べてみると、繋がりが見えてきました

除虫菊が因島に入って来る前年の明治十九年（一八八六）に、因島から紀州の粉河と有田へ、八朔が渡っていきます。

因島と紀州とのつながりは深く、時は遡る事五〇〇年前。因島村上海賊と、紀州の雑賀衆は、共に瀬戸内海の制海権のルールの中で共存していました。因島に残る記録にある九年母栽培の古文書に記された年代（天正十七年（二五八九））から数年後、雑賀衆の本拠地・紀ノ川での栽培の記録があるといわれています。

上山氏はアマア氏との間で、植物の物々交換をしています。アマア氏は、アメリカ建国後の間もな

くに起こる人口爆発の問題に、効果的食糧増産と植物栽培や、農作物の輸入の使命を担っていたと考えられます。実際に、アマア氏と上山氏が出会った約二〇年後の明治四十三年には、アメリカの柑橘研究の第一人者・植物学者のスウィングル博士の柑橘の調査団が、日本各地を周り、最後に因島へと入ります。

近年発見された博士の調査レポートには、瀬戸内海の、因島・田熊における柑橘栽培地を、アメリカにそのまま持ち込むことはできないものか、という記述が見つけられました。

八朔と除虫菊を時系列で並べていくと、因島と紀州が一つの線でつながる気がします。一つの柑橘を辿り訪ね歩くと、現時点ではまだ学術的裏付けが取れていないものの、その関係性は、あながち間違いではないことかもと仮想しています。集めた資料と情報を有識者に委ねて、点が線となり、新たな研究論文が出る事を待つことに致しましょう。